

勘助の子孫と一族

勘助の家族や子孫について記された同時代史料は全くないようです。富士宮市山本をはじめ豊橋市賀茂，豊川市牛久保の伝承によれば，それぞれに「勘助に子供がなかった」としているのに対し，新城市黒田山本家の伝承（先祖之覚）や甲陽軍鑑などでは，「勘助に子供があった」とされています。

甲陽軍鑑では，勘助の子息は若年ながら2，3度よい働きをしたが，1575年（天正3）長篠合戦で討死とされています。その名を源蔵，「甲斐国志」では^{こくし}勘蔵^{かんぞうのぶとも}信供と伝えられています。勘助の家族を具体的に示すのは，山本家に伝わる「先祖之覚」です。それによると，勘助の妻は原美濃守虎胤^{みののかみとらたね}の妹または姪で，嫡男勘蔵は父討死の時6歳，長篠で討死の折は20歳で，所領は200貫文とされています。

二男助次郎は，父討死の時2歳，天正2年に15歳で武田勝頼の奥小姓となり長篠へ出陣し，敗戦後に勝頼に従って甲斐^{かい}へ帰ります。武田氏滅亡の天正10年，甲斐深沢城^{ろうじょう}の加勢に派遣され，籠城衆が北条氏に降伏した際に同行。天正18年の豊臣秀吉の小田原攻めの際，伊豆箱根の山中城で討死，31歳だったとされます。

「先祖之覚」では，討死した二人の他に子供はなく，また勘助の孫にあたる世代について記述はないので，男系子孫はいないこととなりますが^{まつえい}勘助末裔と名乗る人々が近世以来各地に出現しています。

黒田の故山本文夫氏は「山本勘助十三代当主」を自称され，昭和50・60年代に精力的に勘助研究を進められました。この覚書の筆者は山本氏によると，助次郎と四代目の兵四郎利平とされています。利平は，大阪の陣で豊臣方に加わって，敗北後は，宇利庄半原の春日寺（寛永8年・1631に洞雲寺）に潜伏していたとされます。

洞雲寺二世住持^{じゅうじ}の成就院勢範（寛永15年・1638～宝永6年・1708）は鳳来寺衆徒で，真言宗の代表者として出府5回を経験しています。彼は太田白雪が「三河国三記録者」の一人とした三河地誌研究の先駆者でした。洞雲寺の本尊薬師如来縁起の筆跡は「先祖之覚」に類似しているとされ，年代や経歴からみて，地元における山本氏系図や勘助伝承を集成して「先祖之覚」をまとめ上げた最有力候補者のようです。

<参考> 豊川市史

